

24色のペン

パリから見る「ためこみ症」＝田崎春菜

田崎春菜 オピニオン | 速報

毎日新聞 | 2025/5/12 06:00 (最終更新 5/12 09:52) 有料記事 1711文字



インタビューに答える九州大大学院医学研究院
の中尾智博教授＝福岡市中央区で2024年12月
24日午後0時20分、矢頭智剛撮影

家の中に散乱する使い捨て容器やレジ袋、書類の山。一見すると価値がないものを収集し、捨てることができない「ためこみ症」の症状だ。重症化すると、収集した物が家中を占拠し、しまいには外にまであふれ、いわゆる「ごみ屋敷」にもなる。ためこみ症は治療を必要とする精神疾患だが、「片付けられない人」などに見なされ、個人の内面的な問題として扱われることも多い。

ためこみ症は2013年、米国精神医学会の診断基準で精神疾患と位置づけられた。症状は、物を大量に集める▽集めた物の整理整頓ができない▽実際には価値のないものにも有用性や強い愛着を感じ、捨てられない――というもの。

幼少期から思春期に強いストレスとなる体験があると、それをきっかけに物への愛着が高まり、10代ごろに徐々に発症するという。20代半ば～30代にかけて重症化していくとされる。自然治癒は難しく単身生活によって悪化する傾向がある。総務省の調査（22～24年）によると、人口10万人以上の30市区が把握した181の「ごみ屋敷」では、単身世帯が約6割にのぼった。

ためこみ症の研究や治療に取り組む九州大大学院医学研究院の行動療法研究室では、12年以降、約100人の治療に当たってきた。リビングや台所にティッシュなどの消耗品を購入時の袋のまま放置していた30代女性、空の段ボールを500箱集めて3DKの部屋が埋まって廊下が寝床になっていた60代の女性など、症状はさまざまだ。

研究室によると、有病率は約2%とされるが、実際に受診に至るのは、「ごみ屋敷」状態を指摘されたり、別の精神疾患の治療で判明したりするケースが多い。中尾智博・九州大大学院教授は「治療につながっているのは氷山の一角。実際には100倍以上いるのではないか」という。

症状が悪化する前の早期治療が望ましい。しかし医療従事者でも精神疾患という認識が薄く、治療できる医療機関もかなり限られている。そんな中で研究や治療に関わる専門家らは今、「パリモデル」に注目している。



安発明子さん＝福岡市中央区で2024年12月24日午後0時23分、矢頭智剛撮影

パリ在住で、フランスの子どもや家庭を巡る福祉政策を研究する安発明子さん

(43)によると、パリでは15年の同時多発テロを目撃してトラウマを抱える若者などにためこみ症の症状が出ており、社会問題化したとされる。24年10月にはパリ市主催の勉強会があり、ソーシャルワーカーら約300人が参加。フランスやベルギーの取り組みなどが紹介され、日本から中尾教授らも出席して講演した。

この勉強会で、中尾教授はパリの取り組みに感銘を受けた。パリでは、ためこみ症を福祉と医療の両方に関わる精神疾患の問題として分野を超える専門チームで対応する。チームは精神科医や看護師、ソーシャルワーカーら6～8人で構成され、家主との

やりとりや代替住居の準備などに当たる。訪問しても応じてくれない対象者に対し、ドア越しに1時間話し続けるなど、根気よく寄り添うという。

安発さんは以前、関東の自治体でソーシャルワーカーとして「ごみ屋敷」に対応したが、その時は精神疾患としての認識が薄かった。ためこんだ物の必要性を本人に確認せず捨て、反発されたことも。「人権的な対応ができていなかった」と振り返る。

中尾教授は「本人の意思を無視して片付けても根本的な問題は解決せず、必ず繰り返す」と語る。しかし、自ら治療の門をたたく人は限られている。そこでパリの事例を見習い、行政や地域と連携することで、これまで見過ごされてきた人々にも手を差し伸べられるスキームを描く。

現代は核家族化や結婚率の低下によって孤立しやすく、ためこみ症になりやすい状況だと、中尾教授は危惧している。新型コロナウイルス禍でリモートワークも広がり、外部との直接的な接触がなくても過ごせる時代には、ためこみ症「予備軍」も増加する可能性がある。

「パリモデルの次は福岡モデルを」。パリの取り組みに触発された中尾教授らは、地元の福岡市や社会福祉協議会と意見交換会を開くなどし、ためこみ症対策の新しい形を模索している。【社会部西部グループ・田崎春菜】